

	第４回石川町振興計画審議会
	平成２０年７月２３日（水）１９：００から
	石川町役場 第一会議室
	出席委員 西川一英会長、渡邊忠栄副会長、相楽一重委員、水野光成委員
	野崎良子委員、瀬谷浩宣委員、深谷恒夫委員、添田好史委員
	添田一文委員、斎藤英幸委員、山口一雄委員、添田京子委員
	鈴木后世委員
	町出席者 瀬谷企画調整課長 添田企画係長 佐川主査 大竹主査
	１ 開会
	２ 会長あいさつ
	今日は暑い中ですが、自然の中で思い切り良い汗を流していきたいなというように思います。忌憚のないご意見を出していただきたいと思います。今日はどうも御苦労さまです。
	３ 説明事項
瀬谷企画調整課長	まず、私のからは前段少しお願いも含めてお話しさせていただきたいと思います。
	本日、このような形で審議会を開催させていただきましたが、通常ですと振興計画審議会の中ではまとまった計画を諮問という形で出すという状況が多いのですが、今回は事前協議の場という形で皆さんの方に資料をお配りしています。内部的にも作業中ということでもありますので、このような点もご理解いただきながら、皆さんのご意見なども、逆にいえば、この作業の中で活かすことができるということも言えると思いますので、そのようなご理解をお願いしたいと思います。さらには、過日の西会津町の視察に関係することなどもご意見を頂きながら進めていければと思います。この視察についても８月の下旬にもう一度日程を作っていきたいと思っていますのでよろしくお願いいたします。この審議会について前回は１２月でしたので、半年くらいの期間が空いております。この間、アンケートを集計したものを昨年の９月に公表して、それから若者、女性のまちづくり委員会の提言を昨年の１１月に受けており、それまで皆さんのほうにご報告申し上げたところでありますが、今回は、昨年、作業を進めておりました地区まちづくり委員会の関係の報告、それから、まちづくりプロジェクトとして５つのプロジェクトの作業をやっていますので、その関係の報告。それから、総合計画の基本構想についても作業中ではありますが、皆さんにお配りしております。これを今回ご検討いただいて８月には基本計画をもう少し詳細なものを、ご提示してご意見をいただくような形になっております。現実には諮問というのは１０月の上旬を考えていますので、それまで、色々作業という形でご検討を頂ければというように思っています。最終的には１２月の議会で決定をしていくというペースで考えております。詳しいものは後でご連絡を申し上げたいと思っています。
	それでは、資料の１ページにイメージ図があります。これについては、「みんなが主役協働と循環のまち」という説明文をあげてありますが、前回の中では「協働で築く地域循

	環型社会の構築」ということでご説明を申し上げましたが、なかなか「地域循環型社会」というのが解りにくいということから、できるだけわかりやすい表現をするということ、 「みんなが主役 協働と循環のまち」という形で表現をさせていただきました。これについても、今、作業中の表題でございますので、皆様からも色々ご意見を頂ければと思っています。 「協働」については、行政と町民が一緒にまちづくりを進めていくという視点でございますけれども、「循環」の意味合いが、一般的に使われているのは資源の循環というところで使われておりますので、今回、この「循環」というのは、資源の循環プラス人と人とのつながりですとか、行ったり来たりの交流という意味合いを含めて「循環」という表現に位置付けていきたいと考えていますので、色々ご意見を頂きたいと思います。 サブタイトルとして「～ひとが輝き・ときを慈しみ・ものを愛でるまちづくりを目指して～」ということで、「ひと」「とき」「もの」を意味的に繋いで、「協働」と「循環」という考え方の中で、この第5次総合計画の基本構想、基本計画、まちづくりプロジェクトを組み立てていくという考えでおりますので、こういった視点を今後の作業の中に盛り込むということでございます。
	①石川町第5次総合計画基本構想（案）について
添田企画係長	
	（資料について説明する）
	②まちづくりプロジェクトについて
添田企画係長	
	（資料について説明する）
	③地区まちづくり計画について
添田企画係長	
	（資料について説明する）
4 質疑応答	
西川会長	何日もかかって作ったものを、ここで議論するわけですから、私たちも消化しきれない部分があるんですが、皆様方からの遠慮ない質問の中で、できるだけ理解を深めていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。
渡邊副会長	施策の大綱がありますが、すごくわかりやすく、模範解答のようでもあります。ただ、重点プロジェクトとして町が直面しているのは地域の活性化と人口減少にどのように歯止めをかけるのか。やはり町の活力をどう作っていくのか、その中で、重点プロジェクトとして、工場誘致とかを重点的に町ではやっているわけですが、重点プロジェクトとして工業の振興や観光の振興などを人口を増やす、活力を生む。そういった何かをプロジェクトとしてうまく付け加えられないものかなと思いました。
瀬谷企画調整課長	企業誘致の関係と観光の問題なんですけれども、企業誘致についてはプロジェクトの議

	論もしたのですが、非常に規模は大きいんですけども、工場用地を造って企業を誘致するということになると、どちらかというこのプロジェクトは長期間にわたって、いろんな分野が絡み合う、そういったものを想定していたものですから、企業誘致関係は基本計画の中に位置付けて、今、現在、具体的に進めているということで、今回、このプロジェクトの中からは見合わせています。
	観光面は、「さくらの郷づくりプロジェクト」の中で取り組んでいく交流人口の増加などを桜を突破口にしてクリアしていけるか、というところが鍵になっていくのかな、というような捉え方をしています。
添田企画係長	人口の問題は非常に内部でも議論してきました。現実的には、今、石川町の人口の構成上、人口を増やすということは、非常に厳しい現実があります。なぜかという、少子化も問題なのですが、少子化の原因はやはり子供を産む女性の数が少ないという状況にあります。そういった意味では、人口を増やすということになりますと、よそから大量に人を石川町に誘導してこない限りは、人口はなかなか増えない。そういった意味で、人口の将来予測についても非常に厳しく見ている状況にあります。ですから今の考え方の中では、どう歯止めをかけていくか。そういった視点で、人口減少問題は捉えていく必要があると考えています。
渡邊副会長	独身者が多いんで結婚を進めなくちゃいけないと思うんです。私は内モンゴルに何度か行っているんですが、向こうでは日本人を意識しているんです。米とか日本食とか。企業訪問をして、日本食を食べている若い人がたくさんいるんですね。日本語も上手だし。そのように日本人にすごく近くって、中国でも東北ですごく純朴で、本当に日本人かなって思うような感じなんです。そこの内モンゴルの自治区なんですけども、そこから研修生をどうかっていう話が来ているんです。その受け入れも検討するなかで、こちらに来て定着する中で、男女の恋とかでカップルができて結婚が増えてくるとか。そしてあまり日本人と変わらない。こういったことも是非、前向きに検討していただければいいのかなと思います。
添田企画係長	「子育て夢プロジェクト」には、出逢いという部分も含めて考えています。
瀬谷企画調整課長	それから交流関係のことについて、もう一点は、最近の動向を見ますと、道の駅が近間との交流の起点に、中心になっているというのが強いです。今回の「人と森と土をつくるプロジェクト」のなかでは、その直売所と併せて道の駅の整備もこの中に入れていくのも必要であると思っています。
深谷委員	まちづくりの将来像で「経済の低迷や少子高齢化が叫ばれている今こそ、新たなまちづくりへの絶好の機会として捉え、町民の夢や希望をみんなの手で実現していくことがこの総合計画の目的です。」とあるが、絶好の機会とは？
添田企画係長	これは町民の方々においての経済状況も非常に厳しい状況の中、町の財政状況も非常に厳しい状況にあり、町民の皆様には非常にご不便をおかけして、色々、批判を受けている

	ということで、こういう部分をみんなで力を合わせて、そして、まちづくりをしていこう
	という思いでまとめたということです。
深谷委員	昭和４８年に町の振興計画を立てたんですね。その時のテーマというのはどうなんだと
	いうと「希望に満ちた、豊かな石川町」ということで、始まっているんですね。ちょうど
	私は３０代だったんですね。それから１０年経ってどうだったか。本当に、豊かで、希望
	に満ちた、豊かな石川町づくりができたかどうか、その辺の評価はどのようなのか。というの
	は、きちんと認識ができていますかね。それから今度は「豊かで、住みよい石川」。
	なおさら、そうですね。といった場合、本当に１０年間のスパンの中で、自分たちが立て
	たテーマが町民のみなさんに浸透して、本当に町民が「そうだ、俺たちの生活は、前より
	少し良くなったんだ」そういうね、実感を割り切っている。アンケートなんかを見たって、
	５０％が不満なんです。じゃあ、何に対して不満なのか。その辺の分析はどうなんですか
	ね。
添田企画係長	昭和４８年、昭和５８年についての詳細については、当時、どのような検証をしたのか
	というのは、正直に申し上げましてこの場では把握しておりませんが、第４次総合計画に
	ついては、第５次総合計画の策定にあたって４総の検証と町民アンケート調査を行って満
	足度を測り、それに立って、今回の計画をつくるというような形で考えております。
	それから、アンケートの部分はどのようなことかといいますと、全体部分の満足度と個
	別の部分の満足度を別けて調査をしております。安全・安心や利便性、福祉などと幾つか
	に分けております。例えば、産業の部分の不満が６０％を超えていたり、教育・文化、福祉・
	健康といったものに対する不満が高いという傾向が読み取れると思います。
深谷委員	私はね。計画というのはね、確かにその、蓄積されていくもの。だから蓄積されていく
	ものだけでも、その土台がぐらついていると、例えば、いくら上積みしても、これから
	計画を立てても、やっぱり、ぐらつかない。そのぐらつきがやっぱり、町民に対して、何
	か納得できないだろうというふうなね、原因につながる気がする。その辺が、よく読んで
	みると、確かに文章として文言としてはいいんだけど、本当に、計画として、スター
	トした場合にいいんだろうか。そういう疑念を私は感じます。
瀬谷企画調整課長	大きな流れで言えば、この前半の昭和４８年、５８年、こういったものは、石川町だけ
	が突出して良くなったかどうかというのは別にしても、日本全体が、本質的な豊かさが、
	高度成長の中で出来上がった時代であろうと思うんです。今回の第４次総合計画の中で、
	先程、添田のから申し上げましたけれども、この時代になってからでも右肩上がりの人口
	とか、そういう予測のもとでやってきて、それが相当のギャップがありました。今回の総
	括の中では、できるだけ実態に近いものでやっていこうと。特に、今、住んでいる人たち
	の満足度をどう高めるのかというところについてのポイントになるということで、できる
	だけ、深谷委員さんから言われたように、あまりこの計画が実態と離れないところで作っ
	ていこうという方向性でというのがありますので、どうしていけばいいのかというのは、
	議論を進めなければならんと考えています。第４次とは相当違ったつくりになっていると思っ
	ています。

深谷委員	首都機能移転の話がありますね。あいう話が持ち上がった時に、町の計画というのは、
	多少、ずれるのか。どうなんですか。
瀬谷企画調整課長	相当、影響しています。第４次総合計画をつくりまして、首都機能移転があり、県では
	あぶくま新都市構想を掲げました。あぶくま新都市は１万人の人口を玉川、石川に持って
	くるということでした。ですから、これを受けて４総をやっています。ですから人口もそ
	れなりに伸ばさなければならない。このような中での計画づくりになりました。でも今回
	はそういった大型プロジェクトがなくなったということで、人口推計も国の推計のとおり
	に下がってきている。これをどう止めていくのかっていうのがポイントだっていうように
	なっています。おそらく、今度の平成１２年から１７年の国勢調査の結果が出ると、もっ
	と下がる率が急降下してくるんじゃないかという推計です。それをどう留めるのかという
	のが問題であると考えています。
鈴木委員	介護保険の会議の中で、今後、療養病床の削減が実施されているので、所謂、医療難民
	というか、医療の中で在宅で看なくてはならないという人が、明らかに増えるんじゃない
	かということが、きちんと判ってきているという現実があるので、町としても住民の住み
	たくないという理由の一つにも、医療の充実がないということが、すごく石川にとっては
	あるんじゃないかというのを気付かれて無いというのが、あるんじゃないかということが
	言われてました。それから、救急医療の時に石川には救急病院がない、入院がないという
	のがあるんじゃないかなというのが、やっぱり、いつも気になるってことを言われま
	した。それから、介護施設の人員の容量が町として、今後の高齢化が進んでいく中で、そ
	ういう状況を理解して、解決していくのかっていう施策を中心に、ある程度、据えていか
	なければ。管内５町村で手を挙げるとかをしないと、県にいくら言っても、足りていると
	いう返事しか返ってこないのだけれども、現実というものをもっときちんと見極めて、県
	に早く提言した方がいいという表現を入れました。第５次総合計画の中にも、是非、この
	ことだけは入れておかないと石川が医療の谷間のまま、往診をしてくれる先生がいたりす
	ることで、確かに看取りとか、終の住処としては良い環境かもしれないのですけれども、
	今後そういう状況になっていくのが目に見えている中で、何の施策にも出てこないという
	のは、非常に不満だなというように思っています。それを施策のどこかに入れていただき
	たいなというのがひとつ。
	それから、もうひとつ気になったのは、まちづくりプロジェクトの中で、「ＯＲＡＨＯ
	のまちづくり」というなかの「ＯＲＡＨＯ」というのがすごく気になったんですね。ほか
	のプロジェクトは全部、普通の言葉で表現しています。ＯＲＡＨＯという言葉は石川でも
	あまり使わないんじゃないかなと思うんです。この言葉を目標のところに掲げていくとい
	うことは、これから若い人たちが見た時に、これはどういうことなのかな、という感じを
	抱かないかなと思ったので、そこのところは、もう少し、何か違った言葉があったらいい
	のではないかなと提案したいと思います。
西川委員長	文言についてなんですが、「ＯＲＡＨＯ」という表現は、みなさんどうでしょうか。
斎藤委員	私は「オラホ」については、それほど違和感はないと思います。

	私は、「さくらの郷づくり」ということで、桜についてはどこにでもあるものなのですが、桜谷ということを知って、これを復元することで、物語ということでアピールすると面白いかなと思います。白河のほうにいった時に、町中を高いところから見下ろすというのがあって、春夏秋冬と良いだろうと、その辺は景観ということ。桜の谷として整備して、昔からの方向に力を入れるといいのではないかと思います。
相楽委員	「オラホ」は、おらげの方ということなので私は愛着があります。 どこの町でも商店街が疲弊してゴースタウンみたいになっているのが現状なんです が、そういう中で基本目標の中に、さりとて商店街の、商業の振興というのがあげられているのですが、現在の石川町の商店街も空き店舗が年々、増えている現状なんです。今、 空き店舗を活用して誰かに商いをしてほしいといっても、現状ではなかなかそういう人は いない。将来のまちづくりという考え方から見れば、福祉関係には大きなウェイトが占め られていると思うので、空き店舗を活用した福祉関係の施設を運用した施策はできないも のかと思います。是非、プロジェクトとして、何か入れられないかと思っています。
	もうひとつとして、地域のまちづくりということ、地域づくりの拠点づくりというこ とは、地区公民館だと思えますけれども、現状の体制ではなかなか難しいんじゃないか と思います。どうしても地域の館長さんを中心として、地域の区長さんたちが中心となっ ていろいろとやっているのだと思うのですが、区長さん方は大体、1年か2年で替わられ てしまうので、どうしても館長にプラスして地域のまちづくりを進めていく人材を、是非、 公民館に張りつけていただくような体制じゃないと、折角、まちづくりの計画を出してい ただいても難しいと思われるので、それを具現化していくための意見として申し上げます。
瀬谷企画調整課長	公民館の問題なんですけれども、イメージとしては、今の公民館は社会教育法の中に位 置づけられている公民館なんです。今後、このまちづくりを進めていって、その地域づく りの拠点となると、またちょっと、そのまちづくりという視点から公民館の拠点の問題を 考えていくということで、運営そのものも、できるだけ持続できていくような、持続でき るような仕組みを作りながら、そこに町が支援をしていく、お金を出していくというやり 方を検討してみてもどうかということは、このプロジェクトのひとつの課題になっていく と思います。今、固定した公民館長のあり方というよりは、そのまちづくりを進めていく ための仕組みづくりをしていく中で、公民館も運営をしていくというようなイメージはど うかというような議論もしているところなんです。これはもうちょっと時間がかかるも のかと思いますが、少なくとも、そこを運営していく人材ともう少しゆとりのある体制を 作っていかなければ進まないのかなというように思っています。
添田企画係長	重点プロジェクトのほうの「子育て夢プロジェクト」の中に、まだ固まったものではな いのですが、子育て支援サロンの開設といった形で空き店舗の活用とかも検討するという 形で位置付けてはあります。子どもに関わらず、そういった別な活用の手法というのを。 保健センターの方でもお年寄りの沙龙的なもの出来るだけ作っていきたいという形で進 めておりますので、そのようなものとの連携はできるのかなと思っています。 先程の、医療関係なのですが、皆様の方には、まだまとまっていないのでお渡ししては いないのですが、実は基本計画ということ、その中で適正な医療の推進ということ、

	救急医療なり、医療の在り方、そういったものを1項目設けてあります。
	どうしても構想のほうではさらっと書かざるを得ないという状況にありますので、基本計画の中でどのように表現していくか、その時点でまたご意見等を伺えればと思います。
西川会長	福祉は産業であると言った方もおりますので、賑わいと活気のあふれるまちというのは福祉を通して、活気のあふれるまちにしても良いでしょうし、この保健福祉と産業が、別々のものではなくて、入り組んでいるようなところを計画の中にどういうふうに位置付けていったらいいのかというのはありますね。
	深谷委員のおっしゃった「絶好の機会」というのは、私も少し違和感がありますね。絶好というのは、待ちに待った機会というように捉えられてしまうので、「新たなまちづくりの機会」とかというような表現にはならないものかと思います。
	それと昭和48年につくった「豊かな石川」、昭和58年の「明るく、豊か」、そして平成5年の「心ときめく」こういうふう言葉が躍ってしまうと何となく、明るいイメージばかり出てまいりますので、厳しい現実を見据えながら言葉に踊らされないようにしていかなければいけないかなと思います。少なくとも右肩上がりではありませんので、やはり持続可能ということから言えば、言葉は虚飾を廃した方がいいのではないのではないのかなと思ってたりもします。
添田（好）委員	この前、西会津町に視察に行きまして感じたことは、在宅医療とCATVと、もうひとつ私が面白いと思ったのは健康というキーワード。沖縄県と交流をされていたんですね。あるいは人材育成。この計画で重点プロジェクトというのはどうかと言いますと、やはりまちづくりプロジェクトの目次みたいなものにしか見えません。それで今、そういう視点から言いますと、このまちづくりプロジェクトを産業にまで持ち上げるのはどうかという問題もございますし、交流というのも桜谷の交流で良いのか、具体的にどうやって他の町と交流することによって、こちらにいい刺激を頂き、相手に対してもいい刺激を与える。また、これで交流を図ることによって、持ち上げないと重点プロジェクトというよりは、本当に狭い、狭義のまちづくり。内輪の人だけで、というか町中の人だけでなんかやっていくみたいな、狭い印象というかそういうイメージしか受けない。
	アンケート結果に有りますように、やはり産業に関して不満を持っている。産業にチャレンジするっていうのは非常に現実的ではないということかもしれませんが、現実的ではないにしろ、今、不満のほとんどは勤め先がないことであり、働く場がないということで、遠くまで働きに出るんですね。で、結果、地域活動ができない。そうすると地域内の町民も協働の共同活動もできていないというところまで来ているのではないかと思います。
	まず、重点プロジェクトとして挙げるのであれば、ちょっとこれは違うんじゃないかなという違和感を感じます。そして、こちらを重点プロジェクトにするのであれば、西会津町のように産業化にすべて持っていけないとだめです。やはりお金が入ってくるような、収支があってくるようなものではないですが、ボランティアではやる人が減っていくだけで先々は衰退していく。であればボランティアであって、きちっとまちづくりをするならばみんなが得るもの得るということで、経済的にも補っていけるという状況をつくることによって、すこし、夢を持たせていただきたいというふうに思います。

水野委員	お年寄りの元気づくりっていうのもわかるのですが、農協でも悩んでいる部分で言うのは担い手をどうするかということなんですね。今、農業者の平均年齢は60歳を超えています。5年、10年後どうなんだという時に、地域の中でも、考えなくてはならないのだけれど、一般的に誰が農業を支えるのかということが課題で、なかなか前に進んでいかないという状況です。
瀬谷企画調整課長	このイメージというのは、どちらかというと高齢者の生きがいづくりを農を起点に取り組んでいきたいというのが狙いです。結局、高齢者の医療、介護費用これは相当大きなものになっていますから、農でいきる高齢者が元気になるというような仕組みづくりをここでやっていきたいということなんです。この地域循環の考え方の中に取り込んでいきたい。ですから、もちろん、有機の堆肥なんかは大規模にやっていく方々の付加価値を高めていくのにもなると思うんですけども。
水野委員	農業の生産の現場の実態は全部高齢者なんです。ほとんど若い人がいないというのが現状です。
瀬谷企画調整課長	団塊の世代が急激にリタイヤして、その中での一部というのを捉えていけるか。本当にそこで食っていけるのかという問題もありますね。年金とその収入とで組み合わせていけるのが良いのかと思うのですが。
水野委員	消費者も食物の安全・安心を含めて、自給率の問題などで、消費者が国産の農産物を支えていかないと、日本の農業はなくなってしまうと思います。 実践の中で、日本の農業を支えていかないといけないと思います。
添田（一）委員	現状の農業の実態として、農業では食べていけないという実感を持っています。 循環という言葉なのですが、「ひと」「とき」「もの」が循環するということなのですが、循環という言葉は「もの」にしか当てはまらないと思います。人に当てはまるとすれば交流などであろうし、時ということでも歴史は循環しているものではないと思います。時というのは流れていくものだと思います。ひとやときを循環という言葉に無理やり当てはめていると思います。 また、農と命という部分でも40代や50代の人たちが、片手間でやっていられるでしょうか。高齢者が年金をもらいながらやっているというのが現状ではないでしょうか。
西川委員長	前の第4次総合計画では、基本目標が教育が最初に来ており、次いで保健福祉、そして産業が3番目だったんですが、今回、この産業を先頭の位置に立てた、そしてまた、農林業の振興ということをその中の最初に立ててあるというようなことで、企業人としての町長さんの意向が相当入ってるのではないかと思います。この辺は、今現在の農業は厳しい。厳しいなかでまちづくりの基本目標の第一のところに農林業の振興を据えたわけですが、より厳しく確実な計画を町側ではつくらなければいけないのではないのかなというふうに思います。

山口委員	今、農業を取り巻くものは急展開していると思うんです。グローバル化の中で安全なもの の自給率というテーマに変わってきている。これからの10年は考え方も変わる10年 間だと思う。農業を取り巻く環境も10年で大きく変わるのではないかなと思っています。 10年もすると農業ができる時代が来るかもしれない気がしています。
西川委員長	G8でも食糧問題は政治の中でも議題になっていますから。
水野委員	東北6県の中での福島県は自給率が低く、唯一、100%を割っています。基本構想中に 農産物の生産に触れていますが、生産ばかりではなく加工についても入れてほしいと思 います。 桜のプロジェクトの中で、高田桜はみなさんの中でも認識があるかと思いますが、この 後継づくりについてはどう考えていますか。
西川会長	今、それぞれの方が、高田桜の子孫を進めています。うちのお寺にも石川中学校の同窓 生が5本ほど植えていけました。 高田桜の後継については、個人レベルで増やしていращやるからもあります。
瀬谷企画調整課長	一般には高田桜は老木でだけだと思われているのですが、私も実際そう思っていたので すが、古木の再生技術に優れた業者もおります。ただ、大変お金がかかるようです。
西川会長	循環という言葉なんですが、「もの」の循環はわかるけれども、町が考えている循環と いう理念はこれだけではないんでしょ。
瀬谷企画調整課長	「ひと」という分野では人と人とのつながり、そういった連鎖、人と人とのつながりの なかで地域づくりとかそういったものをつくっていく、それもひとつの循環という捉え方 をしていますし、交流というような一方的ではない流れで、行ったり来たりの交流もひ とつの循環という概念の中に入れて考えてはどうかというようなことです。 「とき」については、歴史とか文化というのがありますけれども、温故知新ではないで すけれども、そういう昔のことを学んで今の新しいものをつくっていくというような、そ ういったものを教育の中でも、町の歴史なり、そういったものを学んでいったり、また、 新たな若い人を作っていくというようなまちづくりをするというような、そういう概念の 中で、循環というものを共通のものとして使えないかなということです。
水野委員	協働という言葉に違和感を感じるのですが。 現実の中で、協働というのかなという不安があります。
深谷委員	計画は、私たちはこれを聴いているからわかるけれども、一番に町民の人たちが見た時 に、なんだと疑念を抱くものでは何もならないですね。もうちょっとね、理解してもらえ ないし、計画をつくる段階で判断するようにしなければならぬ。やっぱり、一人ひとり が、理解して誰でもわかる。これならやって良いよ、というような導入の仕方、あるいは 理解の仕方とか。そういうアピールの仕方とかね。

添田企画係長	最終的には本編のほうはかなりの厚さになってしまうので、ダイジェスト版を別個に配布したいと考えています。そのなかにもう分かりやすく、どう表現していくかというのは非常に大事ななとは思っております。
深谷委員	特定の人間だけがわかったって何にもならないですね。やっぱり、一人ひとりがわかるようにしてもらわなくちゃね。
山口委員	誰でもわからなければならないということでもないでしょ。
添田企画係長	できるだけわかりやすい言葉を使うようにということで各担当の方には指示をしているのですが、どうしても行政の人間は難しい言葉を使ってしまうということがありまして、これでも、結構、わかりやすく表現したところですよ。また、基本計画のほうもできるだけわかりやすく、わからない言葉は解説を入れながら作っております。そういった意味で、この中でも、もちろん、わからないという言葉があればどんどん言っていたいただいて、それらについては、ほかの表現がないか、または、解説をつけた方が良いのかどうか、そういったものも検討していきたいと思っております。今回、地区まちづくり計画も入ってきますので、今度は地域のひとつの指標にもなってきます。そういった意味では、地区のまちづくり委員会の方や区長さんや地区の役員の方々にも配布するようになりますので、できるだけ表現はわかりやすくしたいと思っております。
深谷委員	先程、鈴木委員が言ったように、「オラホ」は１０代とか２０代の、この辺のレベルがね、どうなんでしょうか。考えてみれば果たして、このままだってしまっているのか。ここににいる人たちはみんな知っていますけれど、１０代、２０代の人間が理解するとは思えないですね。
	計画をつくるときは、上を向いてつくっているのか、下を向いてつくっているのが重要ですね。下を向くとは町民ですね。やっぱり、下を向いて計画を作っていけないと、どんな素晴らしい計画でも、やっぱりトーンダウンしてしまう。ですから、私が一番最初に聞いた、４総の総括から発生したこの計画が本当に１０年間で完成するのかどうかね。数をこなして次のステップになればいいですね。これが未消化で新しい計画をつくっても意味がない。
山口委員	僕はとても見やすくていいと思う。わかりやすくて。「みんなが主役」というのも良いと思います。
	僕が好きなのは「地域自治」という言葉なんですけど、これを構築するということはどういうことなんですか。
瀬谷企画調整課長	この部分は条例をつくって、この「みんなが主役」の条例が、地域のまちづくり計画を推進できるための仕組みを作っていかなければならないということで、地域自治の仕組みをつくるということで、その中で、条例もつくりあげるという考え方なんですけれども。ただ、これは急激にやることは難しいと思います。西会津町のことをみても、相当の期間

	をかけていますから、町は今、地域のまちづくり計画がスタートしたところなので、それ
	らの実践に時間を費やししながら、こうした制度づくりについては、水面下でじっくりやっ
	ていきたいなと思っています。
山口委員	石川町は6つ公民館があるんですが、これは、公民館のエリアを中心にした福祉活動を
	進めるにもちょうどよいエリアだと思います。職員サポーターというのも大賛成で、町の
	職員はノウハウを持っているわけで、我々地域でいろんな活動をやっているのですが、な
	かなか、事務整理が大変で、ちょっとだけ教わるとあとの展開ができてスムーズな活動に
	なりやすいと思うんです。例えば、職員のかたが一団体に必ず加入して、「みんなが主役」
	というより「職員が主役」でやって欲しいと思います。職員に必ず団体に所属しなさいと
	いう命令を出したらいいと思います。石川町のあらゆる団体に職員は入ってないんです。
	なにかノウハウを提供してくれたら私たちは、ゆっくり活動できるし、職員が団体を支え
	たらいいと思う。
西川委員長	一生懸命やっている方もいますよ。
西川委員長	重点という言葉がなくなった庁内での議論の経過というのは。
添田企画係長	例えば、このプロジェクトが行政が行うべき施策の全部を包含しているのであれば、そ
	れぞれ、例えば、福祉の重点プロジェクトはこれですとか、産業の重点プロジェクトはこ
	うですよ、と位置づけができるのですが、
	今の中で、これらのプロジェクトについてもかなり議論を進めてまとめてきたという経
	過があります。そういった意味では、先程、鈴木委員からお話しありましたように、医療
	の部分が何でないのかですとか、といった基本計画との整合性を図る意味でも、まちづく
	りプロジェクトというような形での位置付けにしたという経過がございます。
深谷委員	どこにいても後継者の育成というのが取りざたされるが、一番問題だと思うんですね。
	私が農家に行って誰かいい人いませんかという話をよく聞くんですね。そういう問題が当
	然上がってきてもいい問題だと思うんですね。これがなぜ地区まちづくり計画の中では出
	てこなかったのか聞きたい。
添田企画係長	地区まちづくり計画のなかでは、そのような議論があった経過は聞いておりません。
深谷委員	地区の問題で一番大事な問題だと思うんですね。
瀬谷企画調整係長	直接的でなくても地域を元気にしていく中で可能性もあると思います。
鈴木委員	ひとの循環というところで、他町村から高校に通う高校生の範囲が広がっているのを、
	この高校生を大切に、いろいろな産業体験とか、町の行事の体験とか、その高校生が
	石川町に定着する施策を行ってもらいたいのではないかなと思うんです。3年間、このま
	ちに通ってきてくれている高校生をもうちょっと定着させるようなことがあればいいと思

	います。大学に進学するよりも少し早く就職の方がいいという高校生も増えてきている
	ような気もするので、是非、農業体験とか職業体験とかを斡旋するような、施策がひとつ
	あるとすこし、折角、石川に足を運んでくれている人たちにアピールできて、そういう人
	たちがきっと増える気がするんですね。恋愛対象にもなるかなというような気がしている
	んですね。
瀬谷企画調整課長	計画に織り込んでいることではないのですが、県立石川高校では職場体験や里山の体験
	などを行っています。
西川委員長	外から入ってくる高校生を考慮したまちづくりは大切であろうと思います。 学校は大
	変な産業だと思います。
相楽委員	高校生は商店街への効果も大きいですね。
西川委員長	高校生の視点というのは絶対必要ですね。
野崎委員	各地区からまちづくり計画が出てきているが、地域では歴史に造詣の深い方が多くいる
	と思うのですが、高齢者が中心になって学習会をやって、桜の時期につながって学習する
	ことによって交流ができるのではないのでしょうか。
	町民のかたのうち、興味のある方が年齢を問わず集まる機会を設けたらよいのではない
	のでしょうか。
添田（京）委員	視察研修に行ってみて、長寿に力を入れている西会津町の話を知って、とても参考にな
	りました。
	若い人たちが安心して子育てができる町になったら良いな、保育料が無料になったらい
	いと思います。例えば3人目からは無料だとか。
西川委員長	保育料の無料化はどこまで計画されているのでしょうか。
添田企画係長	素案としては、財政的な裏付けや協議を行っている段階ではありませんが、保健福祉課
	の考えとプロジェクトチームの考えとを擦り合わせが必要であると考えています。
西川委員長	他の町村ではどうでしょうかね。
添田企画係長	他の町村では行っているところがあります。全部無料のところもありますし、全く行っ
	ていないところも多々あります。
	そういった中で、財政状況なども総合的に判断しなければならないという中では、第3
	子以降の無料化が良いのかなというのが、今、素案としてあがっていることになっていま
	す。
	保育料に関しては交付税との兼ね合いもありまして、無料化にすることによって交付税
	も入ってこなくなってしまうということがあります。

西川委員長	人口推計では２００人多くする計画を立てているので、相当のサービスをしていかないとこの数字を達成することは難しいと思います。
鈴木委員	結婚支援金の制度を作ってお金をあげればいいと思います。それから結婚相談の制度や結婚をサポートする事業があればいいと思います
西川委員長	結婚相談員に結婚を相談しに行っている人はいないと思います。
添田企画係長	かつてシャンソンのタベといった事業をやっていたのですが、なかなか成果が現れませんでした。
深谷委員	埴町には役場の業務として入っていて、成果が上がっているんですね。
添田（好）委員	教育の無料化というよりは、貸付制度のほうが良いのではないのでしょうか。
山口委員	就学資金の貸付なんかがあればよいと思うんですがね。
添田企画係長	制度はあるのですが、ＰＲが足りないのかもしれません。
瀬谷委員	大きな計画や大きな目標も大事なのですが、身近な目標を項目に入れてもらえば、目に見える成果という形になるのではないのでしょうか。
	長い期間の中で、身近な目標のほうがわかりやすいともいえると思います。
西川委員長	基本計画の中で、具体的なスパンの短い計画も当然入るのですが、それを３年ごとに見直すということですが。
添田企画係長	実施計画という形で３年ごとに見直しをするとともに、今回の計画には数値目標が入ります。これは平成２５年と３０年に数値をつけるのですが、それに基づいて進捗状況はどうなのかという検証を毎年行うようになってきます。まちづくりプロジェクトのようなお金のかかるものは、一度にはできませんので、できることはどれなのかということを模索しながら一つ一つ進めていく必要があると思います。財政が豊かであればどんなことでも出来るのですが、正直、そのような状況ではないので、全体の中での予算の関係を調整しながら、できるものから進めていこうとするものです。
添田（一）委員	平成の大合併の政策を国が進める中で、前町長は、石川郡の５町村で合併を進めようとしていましたが、石川町は合併を総合計画の中で、どのように考えているのでしょうか。
	西会津町では、合併しない宣言をしているということもありますので、石川町ではどう
	いう考え方で合併問題に関しては捉えているのでしょうか。
西川委員長	前の計画のなかでは、具体的に合併というのを出していました。今回は、それが消えま

[illegible]